『週刊ポスト』2021.1.4(月)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

第143回 吐息まじりのお色気ソング 残念な「封印の歴史」

日比谷の宝塚劇場が満席で賑わっていた昭和43年大晦日のNHK紅白歌合戦、青江三奈はこの年の大ヒット曲『伊勢佐木町ブルース』を歌いますが、セールスポイントの一つでもある「アッアー」という吐息のフレーズは封印され、その部分はカズーという口で吹くアフリカ原産の楽器で代用されました。青江が初出場時に歌った『恍惚のブルース』は問題なく歌えたことから、歌詞の内容より劣情を誘うような「吐息」が問題視されたのでしょう（解禁は14年後の紅白でした）。

『伊勢佐木町ブルース』が話題になっている頃、日テレ系の深夜番組『11PM』で大橋巨泉の相手役として人気を得ていた朝丘雪路が『スキャンドール』というセクシーソングを発売（詞・阿久悠、曲・小杉仁三）しています。「スキャンダルとドール」を合成した和製英語の閨房ソングは、朝丘がそれまで歌っていた洋楽カバー曲や『ふり向いてもくれない』などのイメージを一変させ、「吐息」を駆使した歌唱は『11PM』仕込みのお色気を十分に感じさせてくれます。残念ながら放送各局による自粛の影響でしょう、私が同曲をテレビ・ラジオで耳にすることはありませんでした。

2年後の昭和45年末の紅白には、この年『経験』（詞・安井かずみ、曲・村井邦彦）でブレイクした辺見マリが初出場し、期待を抱かせましたが、披露した曲は『経験』ではなく、その次に発売された『私生活』でした。『経験』の歌詞は口づけと抱擁を拒絶する内容でしたが、辺見の吐息まじりの歌唱が扇情的すぎると判断されたのでしょう。漫画や映画を通じて『ハレンチ学園』がブームになり、テレビでは「オー！ モーレッ」の丸善石油、「見えすぎちゃって困るの」のマスプロアンテナのCMが「有害」とされる中、お堅いNHKの姿勢はまだまだ一貫していました。

『経験』がヒット中の昭和45年8月、脚線美とハーフを売り物にしたゴールデン・ハーフが『黄色いサクランボ』（詞・星野哲郎）でデビューします。昭和34年に大ヒットしたスリー・キャッツの曲をカバーしたものですが、外タレ風にカタカナ表記にして発売されます。

「ウッフン」と吐息まじりに歌う個所をあらためて聴き比べてみると、ロングスカートのスリー・キャッツのお姉さん方のほうが大人の色気を感じさせてくれます。このオリジナル盤は、第1回レコード大賞候補曲となるほど大ヒットしましたが、NHKは「ウッフン」が猥褻感をもたらすとして自発的に放送禁止、この年の紅白からも除外しました。

前出の辺見マリは、『黄色いさくらんぼ』の作曲者・浜口庫之助の門下生でしたが、『経験』収録のときには未成年だったにもかかわらず、年齢以上に感じさせたお色気は、「浜庫学校」で鍛えられた賜物だったのかもしれません。

お色気ソングに限らず、歌の世界から想像や妄想を働かせるのも昭和歌謡のおもしろさであり、楽しみの一つでした。スマホによって世の中から妄想文化が消滅してしまわないことを願い、丑年くらいはモー想歌謡の登場を期待したいものです。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『しあわせになろうね　私的「昭和大衆歌謡考」第4集』（グスコー出版）が好評発売中